

図書館だより

第28号 令和2年3月発行



大島商船高等専門学校図書館

山口県大島郡周防大島町大字小松1091番地1

目 次

巻頭言

専門書選定のこつ？	図書館長	角田 哲也	1
-----------	------	-------	---

第17回読書感想文コンクール優秀作品発表

最優秀賞

キケンを読んで	商船学科 2年	世木 颯生	2
---------	---------	-------	---

優 秀 賞

世のすべての猫好きにこの感想文を捧げる	電子機械工学科 1年	松田 華奈	3
---------------------	------------	-------	---

友と歩む未来	商船学科 3年	神戸 金太郎	4
--------	---------	--------	---

佳 作

私にとって友達とは	商船学科 1年	西村 周太	5
-----------	---------	-------	---

身近な物の大切さ	情報工学科 1年	藤本 拓海	6
----------	----------	-------	---

失敗	電子機械工学科 2年	應潟 奈都	7
----	------------	-------	---

心と時間	情報工学科 2年	阿久根 大翼	8
------	----------	--------	---

「キケン」というチーム	電子機械工学科 3年	藤本 鼓太郎	9
-------------	------------	--------	---

しき（織）	情報工学科 3年	山野 夏美	10
-------	----------	-------	----

推薦図書

謝る力	商船学科	前畑 航平	11
-----	------	-------	----

電気回路を理解する(第2版)	電子機械工学科	平田 拓也	12
----------------	---------	-------	----

ブックハンティングに参加して			13
----------------	--	--	----

図書館利用状況			16
---------	--	--	----

巻頭言

専門書選定のこつ？

図書館長 角田 哲也



元号が変わり、改修の図書館工事が令和元年度の3月に終了します。令和2年度からは改修された図書館が利用できるので学生の皆様には快適な図書館ライフが送られるものと喜んでおります。

さて、図書館だよりという性格上、巻頭言には自分が読んだ本の感想などを執筆するのが筋です。しかし、老眼の進行が普通の人よりも早く進行し、長年にわたり小説を読める状態にありません。このため、推薦の本とか本の感想ではなく、専門書を選定する際の気づきについて書くことにします。

大学生の頃、試験前になってやっと教科書を開くのですが、ほとんど理解できず、図書館で自分のレベルに沿った本で勉強したものでした。学校に勤務し始め、とりあえずは講義の準備と専門性の基礎を磨くため、まず数学の本をじっくり読みました。数学に関しては学習する専門科目がどのように応用されるかを理解するためにC. Rワイリーの微分積分学（ブレイン図書）を読みました。専門科目を学習した後にはとても理解しやすい本でした。一方、数学の本質も必要と感じ、数学30講シリーズ（朝倉書店）を読みました。節目にコーヒープレークという企画があり、その中に数のよもや話が書いてあり、読者に飽きさせないような工夫がなされている本でした。一方、専門教科では学校に赴任した後、熱力学の講義を担当することになり、慌てました。急いで学生時代の教科書を読み返してもさっぱり理解不能！そのときの入門書として“図解熱力学の学び方”という本を選んで講義ノートを作成しました。物理現象が図で説明されており、分かりやすかったです。若い頃、大学の先生と研究について意見交換すると“黒板に図を描いて説明してください”と言われ、何もできなくて青ざめたことがありました。それ以来、人に説明する際はなるべく図を多用することにしました。図を用いて説明することは重要です。30代後半頃から専門書の改訂などの依頼があり、以降、細々と執筆活動をするようになりました。その際、自身の経験から、①図を多用する、②式の展開は丁寧にする、③節目節目でプチネタを入れることを心がけました。

人によりますが、専門書を選定する上で重要なのは自分の基礎学力（特に数学力）にあったレベルの本、図が多い本、および読者を飽きさせない工夫がある本を選定することを推奨します。ノーベル賞を受賞した中村修二先生の本に中途半端に頭のいい技術者は真実を追究する前に頭で考え、意味がないという結論を出すと記述していました。その道の大家が執筆した本は研究に裏付けされた最先端の内容は記述されていますが、読者にわかりやすく書くという概念が少し欠けているように感じます。しかし、最近の専門書のトレンドも変わり、大学生協で専門書を見渡すと“単位が取れる〇〇学”、“サルでもわかる〇〇学”という類いのタイトルの本が増えてきています。現在は読者に寄り添った専門書が増えつつあります。教科書以外に自分に合った参考書を選定し、各専門科目をより深めてもらいたいと思います。

最優秀賞

キケンを読んで

『キケン』 有川 浩著 新潮文庫

商船学科2年 世木 颯生

僕の部屋の本棚には、有川浩さんの小説が一番多く並んでいます。「県庁おもてなし課」や「塩の街」、「レインツリーの国」などなど。どの小説も僕を新しい世界へと導いてくれます。そして恋愛要素がそっと差し込まれているところもたまに好きです。今回、課題図書の中に、有川浩さんの「キケン」があったので迷わず読んでみることにしました。

この小説の舞台は、成南電気工科大学にある機械制御研究部という部活、略称「機研（きけん）」。

部長の上野、副部長の大神の二人に率いられたこの部活は、日々繰り広げられる犯罪すれすれの実験や破壊的行為からキケン＝危険として周囲から恐れられている、キケン部の理系男子の青春物語です。6章に分けられて物語が進んでいきますが、各章の合間に1ページ分、マンガが挟まれているので登場人物のイメージが付きやすくて良かったです。主要人物一人一人に焦点が当てられていて、上野の爆弾エピソード、大神の恋愛話、学園祭での元山のラーメンスープ作り、学園祭当日、ロボット大会での池谷の活躍。中でも、一番印象的だったのは、学園祭の章です。キケン部でラーメン屋を出し、6日間で前年の約3倍である100万円の売り上げを目指し、スープのダシから作る本格ラーメンを売り出す場面でした。無理難題に対して、部員一人一人が自分のできることに全力で取り組み、仲間と協力する姿に共感すると同時にとても興奮しました。やり遂げた時の達成感は相当なものだったと思います。その気持ちを共有できた仲間がいることで、その達成感は何十倍にもなり心に残ると思います。そして最後の章では、元山と元山の奥さんの二人で十数年ぶりに母校の学園祭へ行きますが、黒板に書かれていた仲間の言葉に感動し、胸がいっぱいになりました。

昨年、大島大橋に貨物船が衝突して学校が休校になり、楽しみにしていた商船祭が中止になりました。そのため、今年は1年生と2年生にとって初めての商船祭となります。3年生の人数も多くなく、運営は難しくなると思いますが、全力で取り組んで、全力で遊んで、心に残る商船祭にできたらなと思っています。

そして、全力で取り組み、全力で楽しむという難しさをこの作品を通して改めて実感することができました。こういった姿勢は、自分が今やっているヨットにも通じるところがあります。

初めてヨットに乗ったとき、艇をうまく動かすことができず、危険な場面もたくさんありました。しかし、失敗やミスを恐れずに挑戦することによって、今では自由に艇を自分の思い通りに動かすことができるようになりました。また、艇をうまく動かすためには、海上の技術だけ練習するだけではいけません。整備の段階から全力で取り組み、自分の艇をわが子のように接していなければ、艇をうまく動かすことはできません。艇をうまく動かすことができなければ、楽しむこともできません。全力で楽しむことができるのは、全力で取り組んだご褒美だと思っています。

中学時代、僕は生徒会長をしていました。その時も、生半可な取り組み方では結果がついてこず自分にとって面白くないことがあり、それ以来何もかも全力で取り組むことをモットーにしていました。ですがその気持ちも、高専に入学して1年経ち、薄れかけていました。そんなときにこの作品と出会い、2年前全力で取り組んでいた気持ちを思い出させてくれました。自分にとって今年は、勉強面ではコース分け、航海実習、部活面では国体、インターハイに向けた集大成の年でもあります。今年はあと一歩のところまで全国への道が閉ざされました。僕は先輩とペアを組んでいて、あと一歩のところまで負けたのは、自分のミスでもありました。先輩にとっては最後の大会で、何としても勝ちたかったので、レース後は悔しい気持ちと申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。そんな時、声をかけてくれたのは、一緒に乗っていた先輩を始め、一緒に戦った仲間たちでした。先輩は、来年は絶対勝てよと言ってくださいました。今、全国の舞台へ向けて、全力で取り組んでいます。

人は、一人では乗り越えられない大きな壁にぶつかったときに、初めて仲間のありがたさに気付くのだと思います。僕も、その壁にぶつかって周りが見えなくなったとき、そっと支えてくれるような仲間に出会えるように、僕自身、相手の気持ちを考え、今まで以上に仲間を大切にしていきたいと思います。そして、悩んだり、迷ったりしたときには、そっとこの本を開いてみようと思います。今まで読んだ小説の中で、一番面白く、読んだ後も、どっぴりと余韻に浸らされたこの本は、僕にとって宝物になりました。



友と歩む未来

『きみの友だち』 重松清著 新潮文庫

電子機械工学科1年 松田 華奈

物語は優しいだけじゃないと私が知ったのは小学五年生のときである。

その時大好きだった本の最終巻で、闘っていた主人公が死んだ。主人公が大事にしていたものも壊されてしまった。その話はハッピーエンドだったのかもしれないけど、私は主人公の死が衝撃的すぎて、とても幸せな終わり方だとは思えなかった。

『きみの友だち』。この本には主人公が八人いる。負けず嫌いな子、一見優等生に見える子、八方美人な子や調子の軽い子。少し探せばどこにでもいそうな彼らには、当然友だちがいるし、知り合いもたくさんいる。

例えば、主人公の一人、恵美は、小学四年生のときの事故がきっかけで、今までの友だちを信じられなくなる。唯一の友だちは、体の弱い由香ちゃんだけ。恵美は思う。「私は『みんな』を信じないし、頼らない」。一人一人の子は悪くないけれども、その子が「みんな」の中にいるときは笑顔を向けない。そう決める。

「みんなそう言っているよ」。私は小さい頃、よくこの言葉を口にしていて。例えば意見を発表するときや、物を買ってほしいとき。「みんな」という言葉はとても便利だ。でも、その「みんな」は本当に全員だとは限らない。意外と、数えてみれば二人、多くても五人くらいである。

そう考えてみれば、「みんな」は自分の外ではなく中にいるかもしれない。自分自身で、「みんな」だと思い込んでいる数人の友だち。でも、それは少し危ないことだとも思う。自分と「みんな」以外にも、たくさんの人がいることに気付けないからだ。

恵美の友だちも、最初から敵だった訳じゃないと思う。私は想像してみる。恵美の悪口が広がるクラス。ここで恵美をかばうことを言えば「みんな」はどう思うかな。そう考えて、何も言えない友だちだった子たち。「みんな」なんて本当に全員な訳じゃないのに。すごく辛いし、悲しい。恵美が「みんな」を信じられなくなるのも分かる。

恵美と同じクラスの、堀田ちゃんの「みんな」は、クラスの女子全員だ。堀田ちゃんは争い事が起きないように、毎日注意して生活する。全員の相関図まで作って、慎重に過ごす。

私は最初、「何もそこまでしなくても」と思った。笑顔を作って、人気者でいようと芸を練習して、登校は七つ以上のグループに出入りする。大変だし、疲れるはずだ。でも、堀田ちゃんの気持ちも分かる気がする。「みんな」に嫌われたくないし、争いたくない。かといって、誰かを身代わりにしたくない。誰もが、少しは持つ感情だと思う。

共感したのは、恵美や堀田ちゃんだけじゃない。八人の主人公、それぞれに共感した。

ライバルに負けたくないのはライバルがすごいということを知っているから。虚勢を張るのはかっこ悪い自分が嫌だから。八人共、完璧じゃない。でも、その弱さに共感する。弱いけれど、弱いままでいようとしている人は一人もいないからだ。

誰にだって、弱いところはあると思う。でも、弱いままの自分が好きな人はあまりいないと思う。私は弱い自分が好きじゃないけれど、弱いところから目をそらし続ける自分はもっと好きじゃない。

私が昔憧れたのは、アイドルじゃなくてヒーローだった。中学生の頃は先輩に憧れ、今はぼんやりとしたかっこよさに憧れている。でも結局、全部同じなんだと思う。だからこそ、自分の弱い部分が嫌なんだとも思う。

病気がちの由香ちゃんは、よく入院する。由香ちゃんが休んでいて、友だちなのに寂しくないのかと聞かれた恵美は、「わたしは、一緒にいなくても寂しくない相手のこと、友だちって思うけど」と答える。私は、恵美の言葉の意味が、最初はよく分からなかった。仲が良ければ、一緒にいたほうが楽しい。当たり前な感情だと思う。

でも、よく考えれば、恵美は「一緒にいても楽しくない」と言っている訳ではない。「一緒にいなくても寂しくない」。それは、一緒にいる時間の楽しさが、一緒にいないときにも影響しているからこそ、起こるのではないだろうか。自分がいることで、友だちと離れていても友だちの寂しさを無くせる。それは、素敵で、うらやましい関係性だと思う。

昔読んだあの本の様に、この話も優しいだけじゃない。由香ちゃんは中学卒業の前に死んでしまうし、堀田ちゃんは争いに巻きこまれる。私と少しずつ似ている主人公が傷つくのは辛い。でも、この話はハッピーエンドだ。

私の将来だって、優しいだけじゃないだろう。でも、最後は全部帳消しになるくらいのハッピーエンドだと信じ、歩いていこうと思う。それは少し難しいことかもしれない。でも、私に大切な友だちがいて、腕の中に勇気を与えるこんな本がある限り、私は前を向いて進んでいけると、そう思えるのだ。



世のすべての猫好きにこの感想文を 捧げる

『夏への扉』 ロバート・A・ハインライン著

福島正美訳 ハヤカワ文庫 SF

商船学科3年 神戸 金太郎

近所でネコを沢山飼っているお婆さんは、いつも会う度に、必ず言うセリフがある。
「ネコ好きっちゃんのは不治の病よね。治らんけえ困るね。」と笑う。僕の家で飼っているネコも、そのお婆さんにすり寄って行って「なでてくれ〜」と言うように、ゴロゴロの音を鳴らす。うちのネコは、カレンダーやポスターには絶対使ってもらえない様な見た目の残念なネコだ。そのお婆さんでさえ、うちのネコを見て「味があるね」と言葉を選んでくれるが、うちの家族はいつも全員が心の底から「かわいいね!」と叫ぶのだ。これが「ネコ好き」という病気なんだなといつも納得させられてしまう。

次に生まれ変わるとしたら、絶対にネコだ。「ネコ好き」という病気の人間さえいれば、わがまま放題で、自由奔放に、空気を読まずに生きていける。寒いと思ったら、人間の膝の上にあがって丸まればいいし、暑くなれば、北側のフローリングに大の字になればいい。暇なときにはトカゲやヘビをくわえて帰れば、人間がギャーギャー喜んで(?)くれる。21世紀の今なら、ユーチューブにも出演可能だ。文化女中器(ハイヤード・ガール)をモチーフに作られた様な、丸い自動掃除機に乗っている画像をアップするだけで、まちがいなくインフルエンサー。そして、コールドスリープしなければいけなくなるときには、きっとピートのように一緒に連れて行ってくれるはずだ。

ピートは特別なネコではない。ほとんどのネコは「ニャー」とか「ニャン」とは鳴かない。他のネコを威嚇するときの重低音から、甘えるときのハイトーンまで、色々な声を使い分ける。特に外に出たくてドアを開けてくれと言うときには「ネコ好き」と目を合わせて、一番高い声でお願いされる。これには、100パーセント負ける。出たいときと入りたいとき、一日に何度、ネコの為にドアを開け閉めするだろう? 自分が出入りする為より多い回数なのは確実だ。天気の良い日は開けてやると嬉しそうに飛び出すが、雨の日や寒い日は足が止まる。後ずさりもする。うちのネコはピートの気持ちを良く知っているはずだ。

しかし、ここ何年かは、真夏の昼間に扉を開けてやると、ネコの足が止まる。足でつついても動こうとしない。どうやらクーラーの効いている部屋から出るのを嫌がっている様だ。今年のように暑いと、真夏の天気の良い日に、毛皮を着て出かけられるはずがない。僕にはネコでさえもこの暑さに、驚いている様に見えた。

昔、友達や彼女に裏切られたダンにとっては未来こそが夏への扉だと言った。確かにこの本が書かれた四十年前と比べても、科学や医療もかなり進歩している。電話が持ち歩けるだけでなく、パソコンまで電話のサイズになってどこでも世界と繋がることできる。40年前に治らない病気と宣告された人達が、もしもコールドスリープして、今、目覚めたとしたら必ず元気になれるはずだ。

ダンがラッキーだ。コールドスリープから目覚めた後、タイムマシンで、過去に置き忘れたものを持って帰ることが出来た。僕達はどうか? タイムマシンが出来までは、未来にしか行けないのだ。たとえ、昔の方が良かったと思える様な非常事態が起こったとしても。

今の日本では、超大型の台風が大雨や強風で生活をおびやかす事も多い。潮位が上がって水没する街も多い。昔より、予測出来ない生活環境の変化は、想像以上だ。

その上、年々、温暖化が進む地球上で、今、コールドスリープできるとしたら、何十年後を目指せばいいか、予測がつかない。「ネコ好き」とネコが住みやすい地球の未来を、僕達が考えなければならない。もしも、それが出来なかったら・・・。

20世紀の日本に戻って縁側でうちわを片手に、打ち上げ花火を楽しめたときを、ずっと、行ったり来たりしたい。僕達には、二階の窓から屋根伝いに外に出ようとしたネコが、屋根瓦の熱さに、戸惑って命ごいすることの無い未来を築く使命がある。



私にとって友達とは

『きみの友だち』 重松清著 新潮文庫

商船学科1年 西村 周大

最初、この本を取った時、「単なる友情物語かな」とそんな風に思っていました。しかし読み進めていく内に自分と重なるような所があって共感したり、本人の気持ちに執着し目頭が熱くなったりと久しぶりに本が面白いと感じることができた作品でした。読み終えた後も余韻にひたってしまうくらいとっても面白く、考えさせられる話でした。

この物語はある事故をきっかけに起きた友達との亀裂から始まります。それは下校中の突然の雨。当然みんなは傘を持っていなかったので恵美の傘に入ってきた。いつの間にか、おしくらまんじゅうみたいになって道路に飛び出してしまった。そこに運悪く車がきて撥ねられてしまったという事故。その事故によって恵美は両足に障害を負い、二度と自分の足で歩けなくなってしまう。そして、恵美は自分の体が思い通りに動かないことに深く傷つき友達を恨み、お見舞に来た子にも「あんたらのせいだ」と泣いて責め立てたというものです。

これを読んだ時、友達って何なんだろう、親友って何？と普段気にもしていない考えが頭に浮かびました。当然自分にもこの学校に来て一緒に話して楽しい子や普段から集団で行動するグループなどがいます。みんな友達だけど「本当の友だち」って何だろうと友達についてとても深く考えさせられました。誰とも付き合わなくなった恵美と由香。ブンちゃんはモトくんのことが面白く思わない。弱虫も優等生も、ひねくれた性格も八方美人もそれぞれにとって「友だち」の意味がそれぞれにあり、人を見た目から判断するのではなく、もっといろいろ話してみると本当の思い、考えを知ることができるのではと思いました。

また、この本の一文でとても印象に残っているものがあります。それは恵美の「一緒にいなくても寂しくない相手が友だち」というセリフです。悩みました。自分の中での「友だち」は毎度一緒に行動したり、連絡をこまめに取ったりするものだと思っていました。この疑問を母に聞いてみると、母にも昔からの友だちがおり今は神奈川にいて、数年以上連絡を取っていないそうです。その友だちは母が大学生の頃の友だちで同じ大学で知り合った子だったそうです。彼女はあまり裕福ではなく大学に行くお金や自分の住むアパートの家賃などバイトを何個もかけもちし、独力で頑張っていました。「何でその子と友だちになったのか」と僕は聞きました。するとその友だちは思った事をズバツと言ってくれる子で、「お小遣いが少ないけどバイト面倒くさい」などと言うと、「それは甘えだよ」と自分に結構ささる言葉を言われていたそうです。自分はちょっとヒドいんじゃないのかと聞きました。しかし母の言葉は違いました。確かにささる言葉だけど私は全部親から送ってきたお金でほぼ生きていた時に、彼女は完全に自立してギリギリで生きていたから、言葉に嘘がない。ある意味尊敬できる人。母にとって友だちとは悪いと指摘し合えて、例えば何年か会えなくても、心が繋がっている人だそうです。母の話聞いた後はこの文に頷けました。たくさんはいないけれど、一人でも自分にとって財産になる人それが本当の友だちなんだと。

この本は私に友だち、親友とは何か、その定義について深く考えさせてくれました。友だちになるのに理由も理屈もいらない。この本のもこもこ雲のように様々な形があってもいいと思います。このように考えていくと、まだ私には本当の友だち、親友と呼べる存在に出会えていないのではと感じてしまいます。同時に、私は友だちにどんな風に接しているだろう。友だちはどんな思いで私を見ているのだろうと考えさせられました。私はこれから、友達とは何か、親友とは何かについてさらに深く考えたいと思います。この学校に来たこと、この世界には何十億人という中で大島商船S科一年四十人と出会えたことの奇跡を感じて友だちを大切にしていきたい。



身近な物の大切さ

『キケン』 有川 浩著 新潮文庫

情報工学科1年 藤本 拓海

僕がこの本を読んで考えたことは二つあります。

一つ目は、何かに対して全力で取り組むことについての大切さです。具体的には、学校生活である授業や部活動といったものです。今回のこの本でも、部活動や学校の内のイベントなどで、様々な活動をしている描写があります。これらの様子を見て自分は今まで日常のことに全力で取り組むことができていたかという疑問が浮かびました。これも具体例として部活をとると、自分の場合最初は新しい環境や初めての部活動では期待の中で、毎日全力で取り組んでいました。しかし、時間が過ぎていく中で成長があまり実感できず、投げやりになっていきました。これらから考えたことは常日頃から努力をしていくことの難しさです。今からでも遅くないから様々なことについて努力して、将来に繋いでいけるような日常生活を意識して送っていければ良いなと考えました。

二つ目は、

「ここはもう私の場所ではなくなったのだ」

という文章があるのですがここから考えたことがこれも二つあります。

この項目の一つ目は、このような【場所】が今の自分にあるかということです。この本と同じように卒業してからその場所から離れることをのちの人生に引きずるほど大切に思える場所、またはそれと同じようなものがあるかなと考えました。

おそらく今の自分にはそのくらい大切に思える場所はないと思います。それは先ほどもあったように日頃の活動を全力で行っていなかったからだと思います。これからは頑張ろうと何度も考えて実行することはありませんでした。しかし、何事にもやりすぎなくらい本気で取り組んでいる登場人物達を見て、華やかでも完璧でもなくていいから、将来振り返ったとき後悔がないように、そしてそこで得た経験から、将来忘れられないほど思い出深くなるような場所を作っていければいいなと考えました。

この項目の二つ目は、場所だけでなくそれらにかかわる人間関係も大切だと考えました。この本を例にとっても言えるように、自分にとっての【場所】を作ったのは同じ部員だった仲間達です。

ここから、考えたのは仲間達との未来についてです。人は一人では生きていけないとよく言われています。学校生活でも学習面や生活面など様々なところで協力し合っています。今まで出会ってきた仲間達は必ずと言っていいほど卒業後にも関わりがあると思います。今の出会いを生かしていくためにも、自分のことだけに本気になるのではなく、周りにも目を向けていけるようにしていきたいと考えました。

この本を読んだまとめとして考えたことはやはり、今の環境、仲間のことについてです。この本では部活動紹介で爆薬を使用したり、実際のもののような銃を作ったりと、とても真似できるようなものではないものもあります。

しかし、部活動を全力で取り組んだり、行事を自分達なりに工夫して盛り上げたり、仲間の相談に乗ったりなど、ここに書いてあることは幻想ではありません。確かに、自分がやりたいことを盛大にできるような環境や設備というのはなかなか用意できません。

だからといって、本の中だけの出来事だと割り切らず今自分が置かれている環境や仲間達と一緒に今自分にどんな努力ができるかどうかを考えていくことが大切だと考えました。

そして、テストの前日に範囲を暗記するようにその時だけ良ければいいのではなく、できる限り、将来に繋がるようにしていきたいです。

そして自分なりに積み上げてきた、知識や能力を、自分のためだけに使うのではなく誰かの役に立てる、そのような努力をこれからの日常生活で行っていききたいと思いました。



失敗

『失敗学のすすめ』 畑村 洋太郎著 講談社文庫

電子機械工学科2年 應湯 奈都

きっかけは、何気ない友達との会話だった。そして、それは何気ない友達の一言で、「大人は失敗できない、失敗を許されない世界にいる。」と。確かに仕事をする上で、成功を望むのは当たり前だと思う。しかし、その一言を考えていると「失敗」とは、そもそも何か、「失敗」はしてはいけないのか、「失敗」の先には何があるのかと様々な疑問が頭の中を支配した。そんな時出会ったのが、課題図書の一つである「失敗学のすすめ」だった。これはもう読むしかないと思い、本を手にした。

「恥や減点の対象ではなく、肯定的に利用することが、失敗を生かすコツ」と本の裏表紙の説明文に書いてあるように、「失敗」をネガティブなもの、できれば避けたいものというマイナスイメージを持つのではなく、次に生かせるプラスのものとして捉ええることが大事である。また、「失敗」には、「良い失敗」と「悪い失敗」があり、「悪い失敗」を防ぎ、「良い失敗」から学ぶことも非常に大事なのである。「失敗は成功の母」を科学的に実証し、日本人の「失敗」に対する考えを大きく変えた。

私は、生まれて17年、人生を狂わすような「大きな失敗」をしたことがない。高校受験も成功し、いたって平和な学校生活を送っている。思い浮かぶ「失敗」もそんな大したものではなく、よくある「小さな失敗」ばかりだ。強いて言うならば、中学生時代の人間関係での「失敗」が一番記憶に残っているものだろう。このように自分の「失敗」を思い返しているのは、本書のある言葉が影響している。「小さな失敗を不用意に避けることは、将来起こりうる大きな失敗の準備をしていることだ。」と筆者は述べ、子供とナイフを例に説明している。ナイフは危ないからと遠ざけられて育った子供は、ナイフの本当の危なさを知らない。ナイフで指を切るという「小さな失敗」を避けることで、ナイフで人の命を奪えるという「大きな失敗」を招くかもしれない。一見、大袈裟に聞こえるかもしれないがそれほど恐ろしいものなのだ。自分の「失敗」を思い返しているうちにどんどん不安になっていく。いつ自分が、使い方の分からないナイフを他人にふりかざしているか分からない。「言葉」と言う名のナイフで、その場の雰囲気流され口を滑り出たそれで、一体どのくらい多くの人を傷付けてきたのだろうと、自己嫌悪に陥ってしまう。

「失敗」から立ち直れない瞬間があれば、立ち直るチャンスもある。それこそが、「失敗」をプラスに変える、「失敗」から学ぶ、「失敗学」なのだ。筆者は、例として「社会を発展させた三重大事故」と言う小タイトルで「失敗」から人間が学び、成長している過程を説明している。大学で機械の設計について指導している筆者は、機械系を専攻した新三年生の最初の授業でこの話をするように心がけているそうだ。筆者曰く、「成功例」より「失敗例」の方が、学生たちの興味、関心があるようで、よく聞いてくれるそうだ。確かにそうだと、私も納得した。「成功例」には先がない。聞くだけ聞いて終わりだ。しかし「失敗例」ではどうだろう。聞いた後、もしくは途中で「失敗」の原因を考えたり、どうすれば「失敗」しないかを考えるだろう。授業を受ける立場からすると、「失敗例」を聞く方が、自分のためになるような気もするし、聞いた後に「考える」と言う作業を挟んでいるので内容も頭に残る。内容が頭に残れば、材料として次に生かすことができるだろう。

「失敗」に関して、好きな言葉がある。それはアメリカのある女優から生まれた。「失敗とは転ぶことではなく、そのまま起き上がらないこと...。」この言葉と出会ったのは、最近のことだが、私は強く惹かれた。理由は簡単で、説得力のあるこの言葉に納得したからだ。この言葉を思い出したのもこの本が影響していると思う。「失敗」について語る上で、この二つは類似している。この言葉を生み出した彼女も、この本を書いた筆者も「失敗」の捉え方、考え方が他の人とは違う。この二つに出会うことが私も「失敗」の捉え方、考え方が大きく変わったと思う。

私は、工学系の学科で勉強している。工学系の学科だけあって、実験実習も多々ある。実験をする中で、もちろん「失敗」もある。「失敗」を重視し、より深く考察した内容の濃いレポートを作成したいと思うきっかけになった。人類がここまで進化できたのも「失敗」あってのことだ。最初から「成功」するものなんて何もないのだ。「大きな失敗」を避けるためには、「小さな失敗」をするべきである。「失敗」の捉え方を見直すことができたこの本をもっと多くの人に読んでほしいと思った。そして知ってほしい。「失敗」は悪いもの、恥じるべきものではないのだと。

佳作

心と時間

『夏への扉』 ロバート・A・ハインライン著

福島正美訳 ハヤカワ文庫 SF

情報工学科2年 阿久根 大翼

僕は『夏への扉』を読んで、主人公・ダンのとても奇妙な半生が心に残った。そして、最後まであきらめないことの大切さを、少し荒いが、理解することができた。

まず、親友や恋人に恵まれ、これから良き人生を送ろうとする矢先、裏切られてたどりついたのが「冷凍睡眠」という異色の技術。そして未来で「タイムマシン」というさらに異端な技術に出会い、過去に戻って反撃を試みるという二重のタイムトラベルが描かれていて、とても心に残った。そして、どんなときも、希望があり、道があるということを思い知らされた。

最後まであきらめずに反撃を続けた主人公は、また同じ方法で未来に行き、恵まれてハッピーエンドという、良い終わり方だった。

僕は主人公のあきらめずに戦い続ける姿がとても心に残った。なぜなら、自分は飽きやすく、何事も長く続かない性格の人間だからである。

僕が主人公と同じ立場であったなら、とっくに心が折れているだろう。もちろん「仕返しをしたい」「ゆるせない」という気持ちがあるだろうが、それまでである。適切に理由をつけてごまかし、次を生きるはずである。

僕は以前、頑張っていて続いていたことが、大きなミスにより、萎えてしまい、続けられなくなったことがある。今思えば、もっとあきらめずにやっていったんじゃないか、という気持ちが残っている。

この本の主人公・ダンは、人としてすごい心差しを持っている。一度は放心したもののがすぐに目標に向かってあきらめずに続けていった。

僕は、この主人公のような、最後まであきらめずに続けていくことができる人間になりたいと思った。

他にも、僕は「冷凍睡眠」をタイムトラベルに使うという考え方が斬新だと思った。

「冷凍睡眠」という言葉自体は、聞いたことがあった。不治の病にかかった人々が冷凍され、その病が解明されたとき、あるいは他の惑星への移住が可能になった時に解凍されるというものである。

それが今後必要になるかは分からないが、タイムトラベルとして「冷凍保存」がどのようなものかを理解することができた。

今後、タイムマシンなどができ、時間を行き来する時代がくるかもしれない。過去が変わることによって未来も変わってしまう、などということがあるため、このような時間の管理は現実ではどのようにされるのだろう、と毎回タイムトラベル作品を見て思うことがある。

確かに、大切な人を取り戻すために過去に戻りたい人もいるかもしれない。しかし、過去を変えることは、大きな責任を伴うことになる。

最近、「未来人」という存在をたまに聞にする。本当かどうかは分からないが、本当だとすれば、未来ではすでに時間を行き来できるということになる。

未来では、どのような時間の管理がされているのか、どのような感覚でタイムトラベルをしているのか、歴史を変えてしまうことがあるのか、などと深く考えさせられてしまう。

タイムマシンは必要なのか、無い方がいいのか、もちろん分かるはずがない。ただ、これから起こる未来であるなら、しっかり考えておくべきだと思った。

僕はこの本を読んで、「最後まであきらめないことの大切さ」や、「これから起こる未来の技術」について、考えさせられた。

これから将来、自分がどのようなことをしているのか、あるいはどのような考え方になっているのは分からない。しかし、かなり高いハードルでも、最後までやり続け、あきらめないことで、乗り越えることができると思っている。

また、これからどのような技術が世界をどのように変えているかはわからない。しかし僕たちは一人一人それに向き合っていくべきだと思った。

佳作

「キケン」というチーム

『キケン』 有川 浩著 新潮文庫

電子機械工学科3年 藤本 鼓太郎

僕は、作中に描かれている「キケン」のメンバー達の人間関係に興味を持った。彼らの関係は、普通の部活とは性質の異なるものだと思う。最も大きな違いは、彼らが取り組んでいるのは、常に「文化祭で元の3倍の売り上げを作ること」や、「ロボットの大会で上位に入ること」等、仕事のプロジェクトに近いものであるということである。

「キケン」を、プロジェクトチームとして見てみると、彼らの関係は素晴らしいものである。彼らには常に共通の目的があり、それに向かって全員が同じ方向を向いて、全員で協力し、高めあっている。また、いわゆる「キケン」独特の、興味が向いたことに関しては好奇心を抑えることはせずに、超えてはいけな一線のギリギリまでやってみるといったある種の「理念」のようなものを全員が良く理解し、共感している。

(キケンの2、3年生がピスを飛ばして遊んでいた話では、これが現れていた。)

最上級生の2人も、後輩の能力をよく理解して、後輩に対して適切な、その後輩が100パーセント能力を発揮してギリギリできるくらいの難易度の課題を与え、それに答えることで後輩も成長していた。後輩達も、難しい課題に直面してもめげない自信と能力があり、先輩達の考えをよく理解していた。つまり、「キケン」の人間関係は、全員が同じ目標・理念を持ち、信頼に基づいた先輩と後輩の上下関係はお互いを高め合っている、理想的な関係と言える。なぜこのような理想的な関係を築けたのだろうか。僕は次のような理由があると思う。

・理想的な後輩が入部したこと

これは、新入生が部活を決めるタイミングで、「キケン」の先輩達は「キケン」がどのような部活であるかをしっかりと示したことで、それに共感した後輩達が入部したためである。また、その方法が校庭で爆発を起こすという過激なものであったため、それに怯まず、周りにどう思われるかを気にしないような強いメンタルを持った後輩達が入部したからでもあると思う。

・理想的な先輩がいたこと

「キケン」の上下関係は、少し変わっている。普通の部活をみていると、先輩と後輩が友達のような関係を築いていることがあるが、これは良い関係とは言えないと思う。先輩にとって、「先輩として後輩と接する」ということは思っていたよりも難しく、責任が伴う。しかし、後輩にとっての先輩、部下にとっての上司というものは特別な存在であると同時に必要な存在でもあると思う。それを「キケン」の先輩達は良く理解している。また、彼らは自分の経験で得た知識を後輩に押しつけようとはせず、後輩が自ら経験して学んでいく過程を見守っている。例えば、後輩達がピスを飛ばす機械を作って競っていた時には、「法律に触れる危険な武器」を作ってしまうように、しっかりと見ていた。そして、後輩達が自分たちのしていることの危険さに自ら気づいてやめた後に、後輩達に「超えてはいけな一線」について、自身の失敗談も含めて話して聞かせていた。つまり、後輩達が自分でそのことに気づけるかを試したということである。普通、先輩というのは後輩が間違っただけをしていたら、「違う、そうじゃない」といちいち口を出してしまうが、「キケン」の先輩は後輩の自主性を信じ、「もしも本当に危なくなったら叱る。それまでは自分たちで気づけるか試す」というスタンスを取っている。これは後輩を信頼しているからできる事ではないだろうか。つまり、「キケン」の上下関係は「信頼に基づいて」いるという事だと思う。

・メンバーが一芸に秀でている

「キケン」のメンバーたちは、火薬を扱うことができる、誰よりもプログラミングができる、といった一芸に秀でている。これは、単にその能力が生かされれば良いものが作れるというだけではない。一芸に秀でたメンバー達はお互いに尊敬することができる。「キケン」のメンバーはお互いの得意な分野においてお互いを尊敬合っている。これはあの理想的なチームを作った理由の一つではないだろうか。

佳作

しき（織）

『「こころ」はいかにして生まれるのか』

櫻井 武著 講談社ブルーバックス

情報工学科3年 山野 夏美

「こころ」は脳だけの機能だけなのだろうか？生体の機能として、どのような働き方をしているのか。

私たちは日々、歓喜の声を上げること、悲しみに暮れること、気分が弾むことなど様々な感情を持つことが多々ある。著書から分かるように脳は感覚系や神経系、内分泌機能を介して全身と接続されているということが分かる。

私は半月ほど前、人魚の眠る家という映画を見に行った。この作品は、ある家族の子供が川で溺れ、脳死状態が続くという話である。脳死状態が続くと心停止まで待つことしかできないため、家族と過ごす時間は少ないということである。結果、家族が選んだ選択は脳死状態の子供を家で介護するというものであった。そこで、脳科学者の方が脳の神経を刺激して体を強引に動かしてみるという実験を行う。目が覚めるかもしれない、という1パーセントの希望を頼りに繰り返し身体を動かし続けたのである。結果、目を覚ますことはなかったが、脳と体内器官は確実に繋がっていることが分かる。よってこの映画からも、脳からの命令を身体各器官に信号として送っている、という体内の状況が見てとれるのである。

脳は、体の器官だけでなく感情と繋がっている神経とも関わりを持っている。「こころ」の源泉は著書のとおり脳で生成されていることが分かる。将来、AIは意識や自我や感情を持つことが可能になるのか、人間の脳がもつ情報をコンピュータに移すことが可能になるのだろうか。以上のようなことが、現代において注目すべき点であると考え。私が中学3年生の頃、AIを題材に小論文を書いたことがある。今から考えてみると3年前になるので、当時からAIは注目の的であったと考えられる。

ここまで、脳と身体の関係について話してきたが、ここからは脳と「こころ」の関係性についてである。「こころ」の本質に深く関わっているものを「情動」という。情動は感情とイコールであると考えてよい。情動は私たちを喜ばせ、幸せにするが、悲しませたり、怖がらせたりもする。情動を有害なものと捉える考え方は、古くから散見されており、プラトンはこう言っている。「情熱や欲求や恐怖は試行を停止させる」と。このように、情動は知性や理性と対照をみなすものとして捉えられている。

人間は、まったく論理的でない判断をすることもあるし、理屈では理解できない行動をとることもある。それらは、「こころ」の働きによるものだ。私も実際、友達関係で悩むことがある。それは自分とは違う考え方、価値観や趣味などがある。そういったことで対立してしまうこともある。しかしそれは、意識的なものではなく「こころ」によるものであるということを、今回著書で知った。たしかに、情動はストレスとも大いに関係があり精神疾患の発症にも関係している。情動と言う機能がなければ、人生がいかに味気のないものになってしまうかは容易に想像できる。私達ヒトは、情動があるからこそ生きていけるのである。この年で人生について語ることはまだまだ未熟すぎだが、沢山の苦難を乗り越えてこそ、楽しさや悲しみが分かるのではないかと考える。よって、適度なストレスも必要なのではないかと考える。

また、「こころ」は学習可能なシステムでもあるが故に、生活環境の影響を強く受ける。人それぞれ腸内細菌叢が違うことなどの環境要因に加え、「こころ」にはもって生まれた遺伝的要因が色濃く反映されているようだ。このことについて親子や兄弟、姉妹が似ているということも同じ事であると考えた。顔や外見なども似ると考えられるが、体内の構造も少しは似るものだと考える。

外見、特に趣味などは各個人で違うものであり、「こころ」もまた個性があると考えられている。嫉妬、罪悪感、羞恥心、愛情などの極めて複雑な人間の心情は、脳のメカニズムによって織りなされるものである。よって「こころ」にも複雑なしくみが織りなされているのではないかと考える。

推薦図書

謝る力

城島 徹 著

清水書院

商船学科 前畑 航平

2018年8月発行の本書は、同年5月に起きたアメリカンフットボールの試合で相手選手を負傷させた大学3年生の謝罪について、著者が「引き込まれていく」ところから始まります。本書では、この20年程に日本で起きたいくつかの事件等について、公表された事実を提示し、どのような立場の人が、どのような対応したのかを紹介しています。具体的には「アイドルグループ」、「料亭」、「食品会社」、「鉄道会社」、「製薬会社」等で、当事者となった組織や人々の言動を紹介しています。

ただし単なる紹介ではなく、著者の「謝る力」を「他人事」とせず「自分事」として受け止め、謝罪の流儀、さらには謝罪を未然に防ぐための日ごろの生き方を考えたい（考えるきっかけにしたい）との意向も織り交ぜられています。

本書を読み終えて、実際に起きたことを知り、どういった状況になったのかを、自身で想像することが大切だとの感想を持ちました。著者の意見に同意できる箇所、疑問を感じる箇所がいくつかありましたが、例えば、インターネット上のニュース記事を読み、その記事の読者のコメント欄を見て、他人の感想、意見を知るのみではなく、本書のような書籍に触れて自分の感想や考えを育んでいくことも大切なことだと再認識しました。

推薦図書

電気回路を理解する(第2版)

小澤 孝夫 著
森北出版株式会社

電子機械工学科 平田 拓也

この本を手元においておけば、基礎的な電気回路の内容において、困ることはほとんどなくなるだろう、というお薦めの1冊を紹介したい。

内容は、第1章に中学校で学ぶオームの法則からはじまり、直流・交流などの言葉の定義、キルヒホッフの法則など、電気回路を学ぶにあたって、初めに知っておくべきことが整理され、以降の章では主に交流回路の計算方法となっている。

オームの法則などの各単元の説明の直下に、例題があって、解説も丁寧であり、理解が進むように工夫されている。これによって、はじめから勉強するときだけではなく、資格試験やレポートなどで必要になる都度、辞書的に参照する際にも便利である。特に各章の最初には、学ぶ上で注意すべきことや計算や諸定理を学びどのようなことをしたいか、あるいはできるようになるかが簡潔に記されていて、何をやりたいのかを見失わずにすむようになっているところが読者に親切である。

もし興味があれば、書店に立ち寄ってみて一度内容を確認してみてほしい。

ブックハンティングに参加して

ブックハンティングは初めての経験で、どんな本を選べばいいかととても迷いました。それに本の数がとても多かったので探すのが少し大変でした。でも、最終的にはみんなが読んでくれそうな本を見つけることができたので良かったです。さらに1人につき1万円分の本が選べたので、本の数をあまり気にせずできてとても満足しました。今回のブックハンティングでは、本に親しみ、いい経験ができて良かったです。来年も是非参加したいです。

電子機械工学科1年 大道 敬久

今回は、図書委員の代役としてブックハンティングにご一緒させていただきました。何かとても堅苦しい感じなのでないかとびくびくしていましたが、とてもゆるい雰囲気ので安心してました。本を選ぶ時間はとても楽しく、気になった本には手を伸ばしていたのですが、ほかの参加者の方はもっと大量の本を取っていてすごく驚きました。僕はあまり本を読まない方なのですが、今回のブックハンティングはとても楽しく感じました。

商船学科2年 村井 隼人

1年生なのでブックハンティングで広島まで行くと言われてもよくイメージできませんでした。実際行ってみると広島の本屋はとても大きくて驚きました。

私はまだ参考書のことをよく知らないので選んだ本のほとんどは小説でした。本屋が大きかったので、自分が興味や関心を抱いた本をたくさん選ぶことができました。私が選んだ本がたくさんの人に読まれるといいなと思いました。

情報工学科1年 堀 遥加

私は今回初めてブックハンティングに参加しました。このブックハンティングの趣旨は教員や館員によって選奨される図書館の蔵書を学生が選ぶことで図書館の利用の促進に繋げることです。私はクラスメイトなどにも相談して「浜村渚の計算ノート」と「ぼくたちと駐在さんの700日戦争」を選びました。どちらの本も多くのシリーズが出ています。是非読んでみてください。

情報工学科2年 水村 真菜

ブックハンティングは、初参加だったので自分が選んだ本が図書館に入荷されるのは新鮮で貴重な体験でした。「緋弾のアリア」は自分が一番面白いと思うライトノベルなので、手に取ってくれた人が一人でも面白いと思ってくれたら嬉しいなと思い選びました。

商船学科3年 武内 祐樹

私にとって本で理解を進めることは分かりやすいと感じることが多く、専門書を重宝するため、このブックハンティングを大変楽しみにしていた。行ったあともその熱は夏休み終わりがさまで冷めることはなく、勢いのあまりブックハンティングの感想を述べるべきところに、選んだマイコン本の感想を書いてしまった。時として、知を得ることの欲求は素晴らしい本との出会いを与えてもくれるが、飲まれすぎに注意である。

電子機械工学科3年 湊 由鳥

今回のブックハンティングで3回目の参加ということもあり時間配分をきっちり考えて回ることができた。最近では本屋さんに行く機会がめっきり減っていたので色々なジャンルにおいて新刊が出ていたのを眺めるのが至福でした。

情報工学科3年 的場 遥佳

普段自分では手に取らない本もこの機会にたくさん購入させていただくことができました。普段よく読む作家さんの小説から、普段なら読まない作家さんの本まで幅広く見ることができたと思います。このブックハンティングを機に、私の読む本の範囲を広げることができたと感じました。

まだ読めていない本もたくさんあるので、これから読んでいきたいです。

商船学科4年 弘中 愛子

私は、服について興味があるので、今回ヴィンテージの服についての本を仕入れました。

この本は、昔から今まで変わらない格好良さが詰まった服が紹介されています。

私がこの中で、一番良いと思った服は、ミリタリーのイギリス空軍の軍用マウンテンパーカーです。生きるために作られた服は、細かいディテールがたくさん詰め込まれている一品です。このように、今も受け継がれている服を見てみるのはいかがでしょうか。

電子機械工学科4年 白木 智大

今回で3回目のブックハンティングになる。

参加するにあたって、クラスの欲しがっている本、総額をあらかじめ決めてきたので早く買い物を済ませることができた。一部専門の参考書、漫画を頼まれたが、買えるものには含まれないので断念した。参考書は同じ内容が被るため買いにくいのは頷けるが、漫画は良い影響を与えるものは少なからずあるのでもう少し増やしてもよいのではないかなと思った。

情報工学科4年 村中 円

今年度5年生ということもあり、就職活動を行っていき同級生と意見交換をしていくなかで、筆記試験でクレペリンがあるということを知りました。

大多数の学生は内容について知らなかったため、内容を知る、知識を深めるためには良いものとなるのではないかと考えるので、是非お勧めしたいです。

商船学科5年 森 陽平

私は昼休みや放課後によく図書館を利用しております。そのため、このブックハンティングのような自分の好みの本を経費で落とせる機会は大変ありがたく、1年生の頃から毎年志願しています。今回は、自分が読みたいものはもちろんですが、普段あまり本を読まない人でも世界観に浸りやすい、読みやすく面白い作品も選んでみました。これをきっかけに、今よりももっと多くの人に本の良さを知ってもらえたらいいと思います。

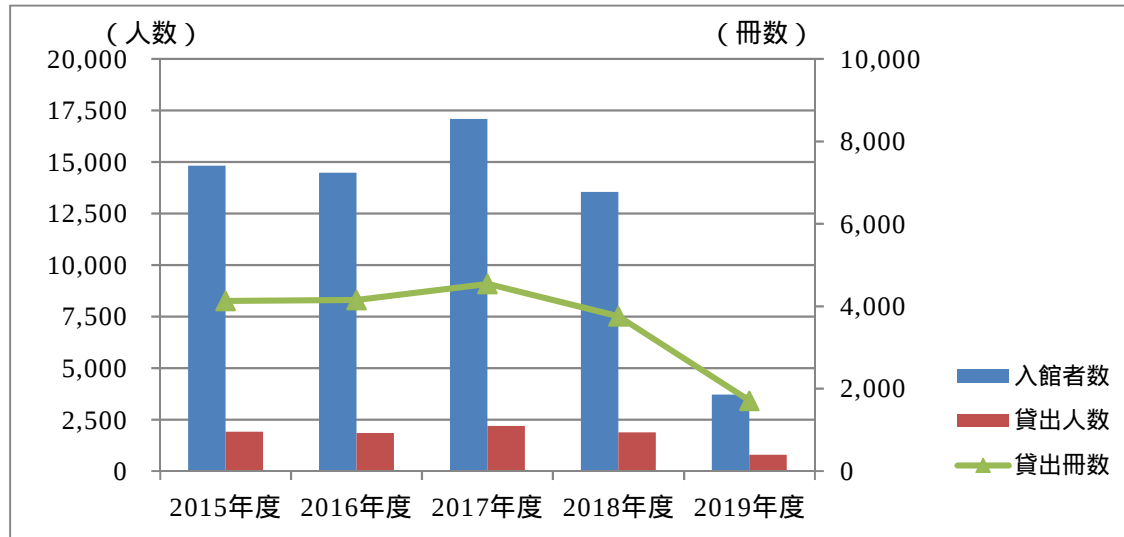
情報工学科5年 大下 光



図書館利用状況

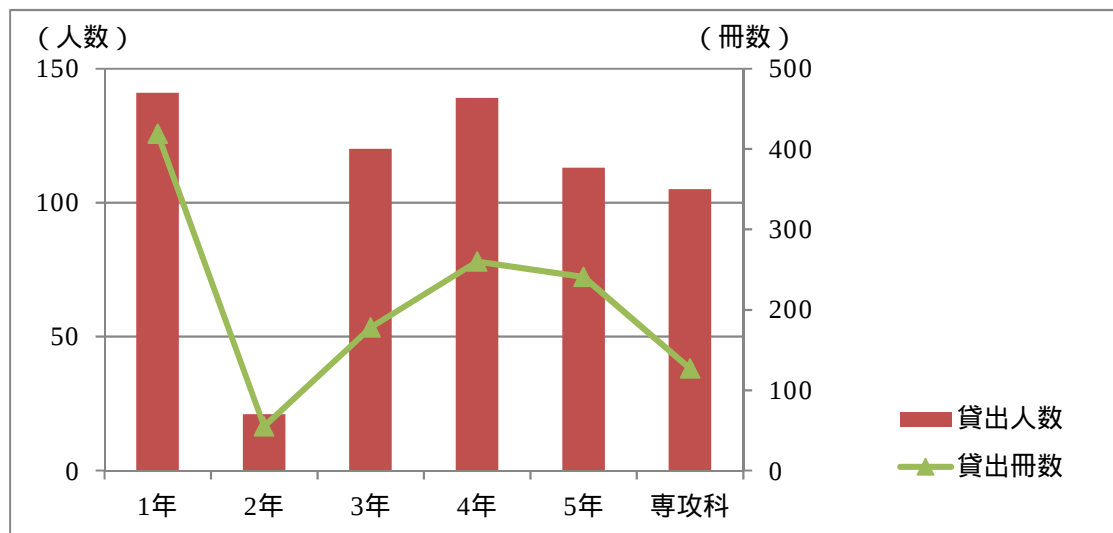
令和2年1月31日現在

年度別入館者数・貸出人数・貸出冊数



	2015 度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
入館者数	14,806	14,464	17,077	13,539	3,703
貸出人数	1,909	1,842	2,182	1,871	782
貸出冊数	4,133	4,152	4,542	3,760	1,709

2019 年度学年別利用状況



	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	専攻科
貸出人数	141	21	120	139	113	105
貸出冊数	419	55	178	260	241	127